

《研究ノート》

## 社会的努力に関する一考察

－社会的アイデンティティ・アプローチに基づく研究のレビューを通して－

小窪 輝吉

## 社会的努力に関する一考察

—社会的アイデンティティ・アプローチに基づく研究のレビューを通して—

小窪 輝吉

和文抄録：社会的手抜き (social loafing) は集団作業における努力低下を指す。これは集団や組織に有害な影響を及ぼす現象であるので、それを除去する方策が多くの研究者から提唱されてきた。その一つに社会的アイデンティティ・アプローチに基づいて提唱された所属集団への社会的同一視を高める方策がある。これは、人が自分がある集団の一員としてカテゴリー化し、成員であることが自己アイデンティティに組み込まれていることを認識すると、人は集団への同一視を強めて集団のために一生懸命に働こうとするだろうと予想するものである。Haslam (2004) は、人が単独で仕事をする時よりも集団で仕事をする時に努力を強めて集団における動機づけ上昇が起こる現象を「社会的努力 (social laboring)」と名付けた。

本論文において、集団状況における社会的努力効果を見出した3件の研究 (Worchel, Rothgerber, Day, Hart, & Butemeyer, 1998; van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, & Tissington, 2009; Høigaard, Boen, Cuyper, & Peters, 2013)) のレビューを行った。6つの実験のうち、社会的努力を見出したものもあったがそれを見出さない実験もあった。将来の研究では、課題特性と社会的努力の関係をさらに明確にしていく必要があるだろう。

キーワード：社会的努力、社会的手抜き、集団の動機づけ上昇、社会的アイデンティティ・アプローチ、集団同一視

本研究の目的は、集団状況における動機づけ低下である社会的手抜き (social loafing) の問題を解決する方策の一つとして、社会的アイデンティティ・アプローチにより提唱された社会的努力 (social laboring; Haslam, 2004, p.170)) について文献レビューに基づき考察することである。

社会的手抜きは個人で仕事をするときと比べて集団で仕事をするときに成員の努力が低下する現象である (Latané, Williams, & Harkins, 1979)。この現象について、一部では個人的な課題遂行のためにエネルギーを取っておくことができるという肯定的側面が指摘されている (Simms & Nichols, 2014)。しかし、多くの研究者は集団の低生産性につながるから社会的手抜きを集団や組織・社会にとって有害なものであるとみなしている。たとえば、社会的手抜きという名前を造ったLatanéらはこの現象を社会的病弊 (social disease) と呼び、集団を活かしながらその生起を抑制する方策を見出すべきであると述べている。その後の研究では、社会的手抜きを生起させる要因を除去することで解決を図ろうとする方策や課題への動機づけの向上を探ることで解決を図ろうとする方策が検討されてきた。

Forsyth (2017) は、社会的手抜きを減らす方策として、①識別可能性 (identifiability) や評価懸念 (evaluation apprehension) を高める、②ただ乗り (free riding) やサッカー効果 (sucker effect) を減らす、③目標設定

をする、④課題への関与を強める、⑤集団同一視を高める、ことなどを提唱している。まず、①の識別可能性や評価懸念を高めることは、社会的な手抜きを生起要因を取り除く方策である。集団で仕事をするとなれば誰がどの程度仕事をしたかわかりにくくなる。そういう状況では人は怠けてもわかりにくいだらうと考え一生懸命に努力しない。また頑張っても自分の努力を認めてもらえないと考え一生懸命努力しない。したがって、集団で仕事をする際に誰がどれだけ努力したかがわかるようにすることで社会的な手抜きを生起を抑制することができる(例えば、Williams et al., 1981)。このような方法は、集団で仕事に取り組むことをやめて個人の仕事にすることになり、いわば集団の解体に向かうことになりかねない(例えばHaslam, 2004)。②は社会的な手抜きの原因の一つとされるただ乗りやサッカー効果を減らすために、集団のサイズを小さくすること、集団のパフォーマンス規範を強化すること、貢献しない者への制裁を設けること、あるいは集団の成功に対する成員の不可欠性(indispensability)を強めることなどがある。なお、不可欠性の強い条件下での動機づけ上昇効果の例としてケーラー効果(Köhler effect: Witte, 1989)があるが、これについては小窪(2010)の文献レビューがある。③の目標設定については、明確で高い目標があると動機づけが高まることが指摘されている(Latham & Locke, 2007)。パフォーマンスに関する基準の提示が予告されると動機づけが高まり、手抜きが消去されることが確認されている(例えばHarkins & Szymanski, 1989)。④の課題への関与を強めることについては、課題の結果が個人にとって重要だと、他成員の動機づけの低下が予想される場合、その穴埋めをするために一層努力をする社会的補償(social compensation)が起こることが確認されている(Williams & Karau, 1991)。⑤の集団への同一視を高めることについては、単独状況のパフォーマンスよりも高い集団パフォーマンスを示す社会的努力が起こる可能性が指摘され(Haslam, 2004)、これまでいくつかの研究で確認されている。本論文では、この集団同一視を高める方策についてその理論的背景となる社会的アイデンティティ・アプローチの仮説と社会的努力に関する実証的研究を紹介する。

社会的アイデンティティ理論(Tajfel, 1974; Ellemers & Haslam, 2012)とそれを補完する形で発展した自己カテゴリー化理論(Turner, 1982, 1985; Turner & Reynolds, 2012)を総称して、社会的アイデンティティ・アプローチ(Haslam, 2004)あるいは社会的アイデンティティ・パースペクティブ(Worchel et al., 1998; van Dick, Tissington, & Hertel, 2009)と呼ぶことがある。本論文では後で述べる社会的努力の存在を指摘したHaslamに倣い、社会的アイデンティティ・アプローチということばを使うが、個別の研究を紹介するときは当該研究者が用いている呼び方を用いることにする。

社会的アイデンティティは、社会集団(あるいはカテゴリー)の成員についての知識とその集団成員性の持つ価値および感情的意味からなる個人の自己概念の一部として定義される(Tajfel, 1978)。社会的アイデンティティ・アプローチは、人がある集団に所属していることを認識すると、肯定的な社会的アイデンティティを達成あるいは維持するために内集団びいきの認知や行動をすると主張する。例えば、最小条件集団研究(minimal group studies)においてタジフェルら(Tajfel et al., 1971; Tajfel, 1978)は、人は些細な基準をもとに特定の集団に含まれることを知ると、内集団(我々)と外集団(彼ら)の認識が起こり、自分が含まれる内集団に有利になるような分配行動をすることを示した。この研究知見をきっかけにして、人が社会的アイデンティティを持つことの効果と心理過程を説明する社会的アイデンティティ理論が提唱された(Tajfel & Turner, 1979)。この理論によると、人は複雑な社会環境を理解し対処するために社会的カテゴリー化(social categorization)を行う。また、人は特定の社会的カテゴリーの特徴を知ると同時に社会的比較(social comparison)によりその特徴の評価を得る。このようにして人は自分が包含される社会的カテゴリーの特徴とそれへの感情的意味からなる社会的アイデンティティ(social identity)を持つ。そして自分が所属する内集団を気にかけるほど、内集団への社会的同一視(social identification)を強め、肯定的な社会的アイデンティティを達成し維持しようとする動機が強まる(Ellemers & Haslam, 2012)。これを集団における生産性の問題に置き換えると、自分が所属する内集団への同一視が強まれば、人は良好な自己イメージを維持しようとして内集団のために一層努力をし、その結果集団のパフォーマンスが向上することが予想される。内集団への同一視を強める方法としては集団間比較をしたり集団成果の重要性を高めたりして社会的アイデンティティの顕現性(social identity

saliency) を高めることが提唱されている (たとえばHaslam, 2004; Worchel et al., 1998; van Dick, Tissington, & Hertel, 2009)。

社会的な手抜きすなわち集団における動機づけ低下に対して、Haslam (2004) は社会的アイデンティティ・アプローチの観点から集団における動機づけ上昇の一つである社会的努力の可能性を示唆している。社会的アイデンティティ・アプローチは、生産性の決定要因として自己定義と課題特性の適合性をあげている。この適合性仮説 (congruity hypothesis: Haslam, 2004, p.168) によると、もし、人がその人独自の個人的アイデンティティで自己を定義する場合、個々人の努力に報酬をもたらすような課題において高い生産性を示し、一方、共有された社会的アイデンティティで自己を定義する場合、他の成員と協力を要する課題において高い生産性を示すと予想する。典型的な社会的な手抜き状況では集団の一員であるという意識を持たせるような「集団らしさ」が欠如しているので、共有された社会的アイデンティティで自己を定義することになっていない。そういう中で集団課題に取り組むと努力の低下すなわち手抜きが起こることになる。社会的アイデンティティ・アプローチの立場からすると、社会的な手抜きは個人的アイデンティティに基づく自己定義と集団活動という課題特性のミスマッチから起こる現象になる。したがって、もし社会的な手抜きの実験状況が社会的アイデンティティに基づく自己定義を助長し集団への同一視を高めるようなものであれば手抜きは起こらず、場合によっては集団のパフォーマンスが個人レベルで想定されるパフォーマンスを超える社会的努力が見られるかもしれない。

社会的な手抜きと社会的努力について、綱引きを例にとりて説明すると次のようになる (e.g. van Dick, Tissington, & Hertel, 2009, p.236)。例えば、一人の引っ張り力が1である人が3人いて3人で一緒に綱引きをすると計算上は $1 + 1 + 1 = 3$ になるはずである。そして、社会的な手抜きが起こると $1 + 1 + 1 = 2.5$ あるいはそれ以下になってしまう。しかし、綱引きの結果が個人にとって重要になると動機づけ上昇により社会的努力が起こり、 $1 + 1 + 1 = 4$ あるいはそれ以上になる。このように、集団で仕事をする事自体が動機づけの低下をもたらすのではなく、仕事をする集団が成員にとって重要であるかどうかで動機づけが上昇するし、低下もするといえる。同様に、Haslam (2004, p.162) もどのようなときに $2 + 2 = 5$  (社会的努力) になるか $2 + 2 = 3.5$  (社会的な手抜き) になるかが問題になると述べている。

社会的アイデンティティ・アプローチによると、社会的アイデンティティが顕現化する状況において集団同一視が高まり、その結果、遂行への動機づけが上昇し、単独で取り組む時よりも集団で取り組むときに高いパフォーマンスを示し、社会的努力が起こることが予想される (van Dick, Tissington, & Hertel, 2009)。

ここで、何をもちて社会的な手抜きと呼ぶか、あるいは社会的努力と呼ぶかについてvan Dick, Tissington, & Hertel (2009, p.236) のモデルをもとに整理をすると次のようになる。集団のパフォーマンス水準がベースラインである個人のパフォーマンス水準に劣る場合が社会的な手抜きであり、これとは反対に、集団のパフォーマンス水準がベースラインである個人のパフォーマンス水準に勝る場合が社会的努力である。

ところで、従来の社会的な手抜き研究で求めてきた社会的な手抜きの消去 (elimination) は、集団のパフォーマンス水準が個人のパフォーマンス水準と同じくらいに改善される (ただし、個人のパフォーマンス水準を超えることはない) 場合を指す。社会的な手抜きの消去という発想は、Steiner (1972) の集団のパフォーマンスの定義から来ていると考えることもできる。彼の集団のパフォーマンス・モデルは社会的な手抜きの再発見を促したものであるが、現実の生産性は潜在的な生産性からプロセス・ロス (process loss) を差し引いたものであるとしていて、社会的努力のようなプロセス・ゲイン (process gain) を想定していなかった。したがって、集団のパフォーマンスを個人のパフォーマンス水準へどれだけ近づけるかが社会的な手抜きの消去の目標となっていた。そこには社会的努力は想定されていなかったといえる。

以下、社会的アイデンティティ・アプローチに依拠した社会的努力に関する研究 (Worchel, Rothgerber, Day, Hart, & Butemeyer, 1998; van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, & Tissington, 2009; Høigaard, Boen, Cuyper, & Peters, 2013) を取り上げる。

## 1. Worchel, Rothgerber, Day, Hart, and Butemeyer (1998) の研究

Worchel et al. (1998) は、社会的アイデンティティ・パースペクティブの立場から社会的手抜きの解消に取り組んだ。彼らの主張は次のようになる。人の社会的アイデンティティは所属集団（内集団）によって決定され、人は自己のイメージを高めるために内集団に利するように動機づけられる。そのため、内集団が個人にとって重要になり個人のアイデンティティの中に内集団が組み込まれると内集団のために一層の努力をするだろう。

彼らの主張を換言すると次のようになる。すなわち、社会的アイデンティティの中に或る集団が位置づけられるためには、まず人々の集まりを自分が所属する集団を構成するものとしてカテゴリー化する必要がある。このようにして内集団が確認されると、それが自分のアイデンティティの中心に位置するように顕現化される必要がある。それが満たされると、自分が所属しない集団（外集団）よりも内集団をひいきするような認知や内集団に有利になるような分配行動が生じる。これを仕事集団に当てはめると、人は内集団のために努力して生産性を高めようとするだろう。

### 実験 1

**目的** 人々の集まりがカテゴリー化により集団としての認識を生むことで集団のパフォーマンスが高まるかどうかを検討された。

**方法** 実験参加者は120人の学生で、男女混合の4人集団で紙の鎖（paper link chain）を作る課題に取り組んだ。大きな紙から細い紙片を切り取り、輪を作って鎖状につないでいく作業であった。まず、実験参加者はそれぞれ個室に入り、10分間単独で紙の鎖を作った。次に、他の人と一緒に集団状況で同じ課題に従事した。その際、個々人がどれだけたくさん作ったかは分からないようになっていてと教示した。そのことを確認させるために、実験参加者は作った紙の鎖を投入する穴が中央に一つあるテーブルの周りに座った。そして、テーブルの上には各人の作業量が見えないようにお互いの顔は見えるが作業の様子が見えない高さの間仕切りを設けていた。実験条件として3種類の集団状況が設定された。集合条件では、4人が1つの部屋で作業をして集団全体の作業量にのみ関心がもたれていると教示された。将来の相互作用条件では、実験者が4人を「作業チーム」と呼び、この課題が終わった後でまた4人がチームとして作業をしてもらうと教示された。集合条件と同じく、実験者は「チームとしての成果」にのみ関心があると説明した。集団報酬条件では、もし集団のパフォーマンスが従来の集団の平均よりも高ければ20ドルのボーナスを出すと教示された。これらの条件の教示の後、それぞれの集団は10分間紙の鎖を作る作業に従事した。実験参加者には個々人のパフォーマンスは識別されないと思わせていたが、各人が使う6色の紙からそれぞれ1色の紙を含めないことで誰がどれだけ紙の鎖を作ったかがわかるようになっていた。集団条件においてそれぞれの実験参加者の作業量が把握できたので、集団条件から単独条件の作業量をひいたパフォーマンスが主な従属変数となった。作業が終わると、質問紙に答えてもらい、実験内容について説明をし、了解を得た。

**結果** 表1は集団条件の作業量から単独条件の作業量を引いた値を集団条件ごとに示したものである。集合条件における差の平均値は-5.20、将来の相互作用条件における差の平均値は-2.05、集団報酬条件における差の平均値は+2.10であった。差の平均値は集団報酬条件>将来の相互作用条件>集合条件となり、それぞれの間に有意差がみられた。これは社会的な手抜きによる動機づけ低下が将来の相互作用の可能性や集団報酬により改善され動機づけの上昇が起こっていることを示している。

また、単独のパフォーマンスと集団条件の差を見ると、その大きさは集合条件が単独のパフォーマンスよりも有意に低く（ $p < .05$ ）、将来の相互作用条件では有意差に達しないが単独のパフォーマンスよりも低い傾向がみられ（ $p < .10$ ）、集団報酬条件では有意差に達しないが単独のパフォーマンスよりも高い傾向がみられた（ $p < .10$ ）。これは集団報酬条件における動機づけの上昇は見られるが社会的努力が起こるまでに至っていないことを示している。なお、社会的な手抜きと関わる識別可能性や課題の楽しさなどの評価に関して条件間に差はな

かった。

表1 それぞれの集団条件における単独条件のパフォーマンスとの差

	集合条件	将来の相互作用条件	集団報酬条件
パフォーマンスの差 (集団条件-単独条件)	-5.20	-2.05	2.10

**考察** 実験1では、将来の相互作用の可能性や集団報酬があると動機づけが上昇し、社会的な手抜きが減少あるいは消去されることが確認された。これは人々の集まりが集団としてカテゴリー化され、将来の相互作用の可能性や集団報酬による集団同一視が高まると集団作業の生産性が高まる可能性を示唆している。しかし、集団報酬の実験操作が単独状況よりも高いパフォーマンスを示す社会的努力を起こすことを確認するには至らなかった。

## 実験2

**目的** 実験1の集団報酬条件の動機づけ上昇効果が相互依存性 (Shaw, 1981; Thibaut & Kelley, 1959) や道具性 (instrumentality: Karau & Williams, 1993) の高まりによるのか、それとも社会的アイデンティティ理論が主張する集団同一視の高まりによるのかが検討された。

4種類の集団報酬条件が作られた。非接合的 (disjunctive) 課題条件では最も優れた成員のパフォーマンスが集団の結果とみなされた。接合的 (conjunctive) 課題条件では最も劣った成員のパフォーマンスが集団の結果とみなされた。加算的 (additive) 課題条件では、成員の平均パフォーマンスが集団の結果とみなされた。集合的 (collective) 課題条件では集団としてではなく成員一人一人のパフォーマンスが問題にされた。

相互依存性および道具性の高まりによる影響を重視すれば、成員の貢献度が集団の成果と最も強く結びつくのは非接合的課題条件と接合的課題条件になるので、両条件では加算的課題条件よりも集団のパフォーマンスが高くなることが予想された。一方、社会的アイデンティティ理論の立場からは、集団への報酬が個人の社会的アイデンティティへの集団の関与を強め、それが集団の利益のために成員の努力を高めるので、非接合的課題条件・接合的課題条件・加算的課題条件の間にパフォーマンスの違いはないことが予想された。

**方法** 実験参加者は160人の学生で、男女混合の4人集団で課題に従事した。実験1と同様に課題は紙の鎖をつくることであった。実験参加者は最初に単独で10分間、その後で集団で10分間作業した。

被験者間の1要因実験計画により4つの報酬条件が作られた。集合的課題条件では、個人のパフォーマンスが従来の実験参加者の平均パフォーマンスを超えれば、その人に3.9ドルの報酬を出すと言われ、できるだけたくさん紙の鎖を作るように教示された。非接合的課題条件では、4人を一つのチームとして扱い、成員の誰か一人が従来の実験参加者の平均パフォーマンスを超えれば、チーム全員がそれぞれ3.9ドルをもらえると教示された。加算的課題条件では、集団全体の作業量が従来の実験の集団の平均を超えれば、集団の全員がそれぞれ3.9ドルをもらえると教示された。接合的課題条件では、成員の全員が従来の実験参加者の平均パフォーマンスを超えれば、チーム全員がそれぞれ3.9ドルをもらえると教示された。そして、誰がどれだけ作ったのかわからないようになっているので、最も短い紙の鎖が従来の実験における集団の平均を超える必要があると教示された。

作業終了後に、「集団」や「自分の役割」などについての認識を調べる質問紙に答えてもらった。最後に、実験の説明をして、全員に3.9ドルずつ支払った。

**結果** 集団条件から単独条件のパフォーマンスを差し引いた各人の値を分析した。4つの課題条件において単独条件よりも集団条件の方が、生産性が有意に高かった ( $p < .05$ )。これはすべての条件において金銭的報酬の効果が報酬による社会的努力が起こったことを示している。なお、加算的課題条件、非接合的課題条件、接合的課題条件の間にパフォーマンスの違いは見られなかったが (すべての比較は  $F < 1.21$  であった)、集合的

課題条件はこれらの3つの課題条件よりも低いパフォーマンスであった ( $p < .001$ )。これは、個人報酬である集合的課題条件では動機づけの上昇が集団報酬である他の3つの課題条件よりは低かったことを示している。

質問紙への回答を見ると、「他の成員の影響力」は個々の成員のパフォーマンスが問題にされる集合的課題条件が他の3条件より低く、また、3条件の中では加算的課題条件の方が非接合的課題条件や接合的課題条件よりも低かった。この傾向は「自分の行動が他の成員に及ぼす影響」についても同じであった。これらは、集団的報酬のうち、加算的課題条件のほうが非接合的課題条件や接合的課題条件においてよりも自他の影響が低いとみなされたことを示している。

自分たちを集団として認識し、集団を自己の社会的アイデンティティに組み込む程度は、個人的報酬である集合的課題条件よりも集団報酬の3つの課題条件の方が高かったが、集団報酬の3つの課題条件間に違いはなかった。これは、集団報酬条件の実験参加者は同じ程度に自分たちを集団として認識していたことを示している。

**考察** 単独状況よりも金銭的報酬を含む集団状況のパフォーマンスが有意に高かった。これは金銭的報酬による社会低努力の生起を示している。ところで、金銭的報酬集団のうち、個人報酬である集合的課題条件よりも他の3つの集団報酬条件の生産性が高かった。一方、集団報酬条件である加算的課題条件、非接合的課題条件、接合的課題条件の間に生産性の違いはなかった。これは、個人報酬よりも集団報酬の方が社会的努力が大きいことを示している。また、集団として認識された集団が個人の社会的アイデンティティにとって重要になれば内集団のために努力することを示している。これには相互依存のタイプによる違いが見られなかったので、相互依存性仮説や道具性仮説ではなく社会的アイデンティティ理論の立場が支持されたことを示している。ただし、集団報酬の動機づけ効果が3つの課題条件ともに見られたことと自他の影響力が加算的課題条件よりも非接合的課題条件や接合的課題条件の方が高かったことから、相互依存性仮説や道具性仮説が完全に否定されたわけではない。なお、社会的アイデンティティ理論に関して言えば、内集団への同一視が高まれば、内集団のために努力をする社会的努力が起こることが確認されたといえる。

### 実験3

**目的** 実験1、2では、相互作用の可能性という集団特性を導入し、あるいは従来の集団のパフォーマンスよりも高ければ集団報酬をもらえることで「集団らしさの感覚」を作った。実験3では、集団のテグリー化を促進させる外集団の存在とユニフォームの存在が内集団への同一視を際立たせて集団作業の動機づけを高めるかどうかを検討された。

**方法** 実験参加者は121人の学生で、男女混合の3～4人集団で実験に参加した。実験1、2と同様に課題は紙の鎖を作ることであった。実験参加者は最初に単独で10分間、その後で集団で10分間作業した。外集団の有無とユニフォームの有無を変数とする  $2 \times 2$  の被験者間実験計画を実施した。

外集団有りの条件では、単独状況での作業が終了した8（または7）人の実験参加者が集められ、くじ引きで2つの集団に分けられた。作業室は大きな間仕切りで区切られていてお互いの集団の様子が見えないようになっていた。それぞれの集団は成員同士の作業の様子が見えないような小さな間仕切りで区切られたテーブルの周りに着席し、1つの穴に紙の鎖を入れていった。10分間の集団作業の後で、課題とチームについての認識を尋ねる質問紙に答えてもらった。外集団無しの条件では、単独状況での作業終了後に4（または3）人の実験参加者が集められ、紙の鎖を作る集団作業に従事した。

ユニフォーム有りの条件では、4（または3）人のチームを「アルファ」あるいは「ベータ」と呼び、「アルファ」あるいは「ベータ」と書かれた白色あるいは赤色の同じ実験着を4（または3）人が着用した。ユニフォーム無しの条件では、4（または3）人のチームはチーム名で呼ばれることもなく、着用する実験着の色も各人バラバラであった。

実験終了後に実験内容についての説明があり、研究について話をする機会を設けた。

**結果** 本研究はチームを対象としたので、集団の作業量の平均値を分析単位とした。各条件における集団状況

の作業量から単独状況の作業量を引いた値を表2に示す。分散分析の結果、外集団の有無の主効果が有意であり ( $p<.001$ )、外集団の有無とユニフォームの有無の交互作用が有意であった ( $p<.05$ )。外集団有りの場合は単独状況よりも集団状況の作業量が高い集団促進 (group facilitation) が見られた。一方、外集団無しの場合は単独状況よりも集団状況の作業量が低い社会的な手抜きが見られた。交互作用に関して言えば、集団促進及び社会的な手抜きの傾向はユニフォーム無しの条件よりもユニフォーム有りの条件において顕著であった。

表2 外集団の有無およびユニフォームの有無条件における単独状況と集団状況のパフォーマンスの差

	ユニフォーム有り	ユニフォーム無し
外集団有り	4.60	1.43
外集団無し	-4.02	-1.26

質問紙で測った「集団への同一視」の程度はパフォーマンスと同じパターンであった。集団への同一視は外集団有りの条件の方が外集団無しの条件より有意に高かった。集団への同一視の程度にユニフォームの有無による違いは見られなかったが、交互作用が有意であった。ユニフォームの存在は外集団有りの場合は集団への同一視を高めたが、外集団無しの場合は同一視を低下させた。

独立変数である外集団の有無とユニフォームの有無が従属変数であるパフォーマンスへの影響過程において「集団への同一視」が媒介変数として作用しているかどうかを調べるために媒介分析を実施した。結果、外集団の有無とユニフォームの有無がパフォーマンスに直接影響を及ぼしはするが、これらは「集団への同一視」にも影響を及ぼし、同時に「集団への同一視」がパフォーマンスに影響を及ぼすという部分媒介 (partial mediation) が起こっていることが明らかになった。

考察 実験3では、外集団の存在が集団状況における生産性を高めることが示された。ユニフォームの存在だけでは集団状況における生産性に影響は及ぼさなかったが、ユニフォームは外集団が存在する場合は集団状況における生産性の上昇を促進し、外集団が存在しない場合は集団状況における生産性の低下を促進した。

媒介分析の結果から、外集団やユニフォームの存在が個人の社会的アイデンティティに対する集団の重要性を高め、集団同一視が高まり、それが集団状況での生産性を高めることが示された。これは、人々の集まりが集団としてカテゴリー化され、その集団への同一視が高まると、集団のために努力するようになるという社会的アイデンティティ・パースペクティブの主張を支持する結果である。

## 総合考察

本研究では、集団成員性の顕現性を高めるために、「将来の相互作用の可能性」「結果の相互依存性」「外集団の存在」「ユニフォームの有無」などの実験操作を行った。そしてこれらの実験操作は単独状況におけるよりも集団状況においてパフォーマンスを高め、社会的な手抜きが消去され、報酬を伴う場合には社会的な努力が起こることを見出した。また、個人の社会的アイデンティティへの集団の関与の高まりによって集団同一視が高まると集団状況における努力の上昇がみられることが確認された。これは集団生産性の領域への社会的アイデンティティ・パースペクティブの有効性を示しているとみなされるだろう。

## 2. van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, and Tissington (2009) の研究

van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, & Tissington (2009) は社会的アイデンティティ・アプローチに基づき、集団間比較により集団成員性の顕現性を高めれば動機づけが上昇し社会的な努力現象が起こることを2つの実験で検討した。彼らは集団成員性の顕現性が高まると集団同一視が強まり動機づけ上昇に結びつくという集団同一視の媒介効果を予想した。



## 実験1

**目的** 団員性の顕現性を高めると集団同一視が強まり動機づけ上昇につながるかを調べた。

**方法** ドイツの学校教員129人に攻撃的な生徒の行動への対処法を個人条件と集団条件で考えてコンピューターに入力してもらいブレインストーミング課題を実施した。個人条件では各人のアイデア数が評価されることが教示された。集団条件では社会的アイデンティティの強さが異なる条件が設けられた。社会的アイデンティティが低い条件では所属学校全体としてのアイデア数が評価されることが教示され、社会的アイデンティティが高い条件では学校全体のアイデア数が他の学校と比較されることが教示された。

**結果** 図1に各条件のアイデア数を示す。なお、図では社会的アイデンティティの低い集団を「SI低集団（SIはSocial Identityを指す）」と記し、社会的アイデンティティの高い集団を「SI高集団」と記す。アイデア数は個人条件が17.7個、社会的アイデンティティの低いSI低集団が16.5個、社会的アイデンティティの高いSI高集団が19.2個であり、社会的アイデンティティの高い集団が個人及び社会的アイデンティティの低い集団よりも有意にアイデア数が多かった ( $p < .05$ )。これは社会的努力が起こったことを示している。しかし、個人条件の方が社会的アイデンティティの低い集団よりもアイデア数が多い傾向ではあったが有意差がみられず ( $p > .10$ )、社会的手抜きは確認されなかった。また、集団への同一視の媒介分析を実施したが集団同一視の媒介効果は確認できなかった。

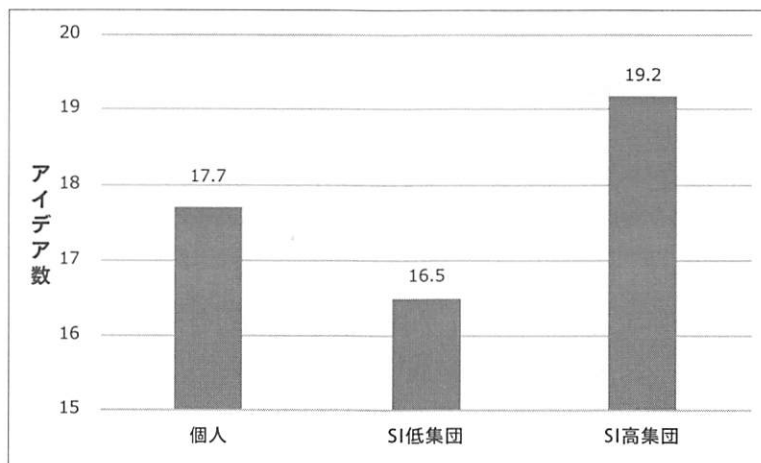


図1 アイデアの数 (van Dick et al.(2009)のp.615に掲載されているTable Iを基に筆者が作図した)

## 実験2

**目的** 集団特性（友人・知人）と集団顕現性（集団間比較の有無）が集団同一視および集団パフォーマンスに及ぼす効果を調べた。実験1のブレインストーミング課題に加えて木製棒課題 (wooden stick task) を用いた。

**方法** 学生141人を3人一組にしてブレインストーミング課題と木製棒を穴に差し入れる課題（以下、木製棒課題と記す）に取り組んでもらった。木製棒課題は、細い木製棒を穴の中にできるだけたくさん差し入れる課題であった。集団作業条件では実験参加者は一個の木製の箱状の差込ボックスの3面に設けられた穴に決められた形で1本ずつ入れた。箱の対角線上に間仕切りがついていて、他の成員を見ることはできなかった。作業時間は3分間であった。ブレインストーミング課題は実験参加者である学生にとって現実的な意味をもつ題材で、「学習環境を改善するためのアイデアをできるだけたくさん考え出す」ことであった。3人集団で10分間アイデアを考えてもらった。発言時間のロスである生産阻害 (production blocking) を避けるために話し合い形式を避け、紙片にアイデアを書いて壁に貼ってもらう方式をとった。実験参加者は自分のアイデアを各自の場所に貼ったが、お互いが書いている内容を読むことができるようになっていた。この課題のパフォーマンスは、2

人の判定者が選定した冗長的でないアイデアの数であった。なお、媒介変数である集団同一視の強さは6段階評定の4項目の質問項目によって測定された。

実験参加者は親しい友人の名前を挙げてもらうことで友人集団と知人集団に分けられた。また、個人ではなく集団としてのパフォーマンスが調べられる低顕現性条件と他の集団との比較がなされる高顕現性条件が設けられた。木製棒差込課題については個々人のパフォーマンスを調べる共行動条件が設けられた。

**結果** 図2にブレインストーミング課題のアイデアの数を示す。なお、図2では低顕現性条件の集団を「SI低集団」と記し、高顕現性条件の集団を「SI高集団」と記す。コントラスト分析の結果、知人・低顕現性集団 (M=25.11) は知人・高顕現性 (M=31.90) や友人・高顕現性集団 (M=31.33) および友人・低顕現性集団 (M=28.30) よりもパフォーマンスが低かった (すべて $p<.05$ )。これは友人や集団間比較により社会的アイデンティティが高まると動機づけが高まり、高いパフォーマンスに繋がることを示している。

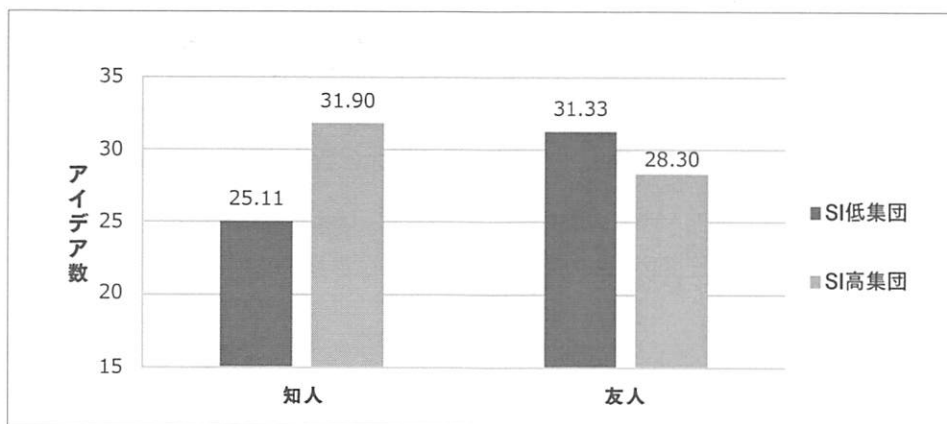


図2 アイデアの数 (van Dick et al.(2009)のp.620に掲載されているTable IIを基に筆者が作図した)

図3に木製棒課題の作業量を示す。コントラスト分析の結果、低顕現性・知人集団条件の作業量が高顕現性・知人集団条件や低顕現性・友人集団条件および高顕現性・友人集団条件よりも有意に低かった (すべて $p<.05$ )。これはブレインストーミング課題の結果と同様、友人や集団間比較により社会的アイデンティティが高まると動機づけが高まり、高い作業量に繋がることを示している。そのうえ、高顕現性・知人集団条件や低顕現性・友人集団条件および高顕現性・友人集団条件の作業量は共行動条件よりも高かった。これは社会的アイデンティティが高まると社会的努力が起こることを示している。ただし、実験2は共行動条件の作業量が低顕現性・知人集団条件の作業量とほぼ同じだったので、社会的な手抜きを見出していないことになる。

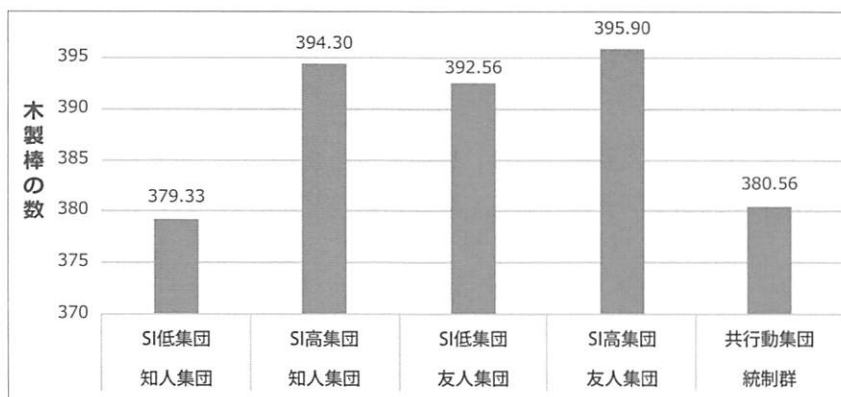


図3 木製棒の数 (van Dick et al.(2009)のp.620に掲載されているTable IIを基に筆者が作図した)

質問紙で得た集団同一視の強さについて、知人・友人集団×高・低顕現性集団の分散分析を実施したところ主効果が有意であったが交互作用は有意でなかった。主効果に関して、友人集団 (M=5.05; SD=0.60) の方が知人集団 (M=4.06; SD=0.79) よりも集団同一視が強かった ( $p<.001$ )。また、集団間比較のある高顕現性集団 (M=4.78; SD=0.75) の方が集団間比較のない低顕現性集団 (M=4.06; SD=0.79) よりも集団同一視が強かった ( $p<.05$ )。

社会的アイデンティティの強い集団 (知人・高顕現性集団、友人・高顕現性集団および友人・低顕現性集団) の高いパフォーマンスを集団同一視が媒介するかどうかを調べるために媒介分析を実施した。結果、木製棒のパフォーマンスに関して完全媒介モデルの有効性が認められ ( $p<.05$ )、集団同一視が媒介効果を持つことが示された。ブレインストーミング課題に関しては集団同一視の媒介効果は有意でなかった。

**考察** 実験2では友人関係要因と集団成員性の顕現性要因が集団の生産性に及ぼす効果が検討された。また、実験1で用いたブレインストーミング課題に加えて、動機づけの強さに直接影響されやすいと思われる木製棒課題が用いられた。ブレインストーミング課題および木製棒課題ともに知人・低顕現性集団の方が、また木製棒課題においては共行動集団の方が社会的アイデンティティの強い集団 (知人・高顕現性集団、友人・高低減性集団、友人・低顕現性集団) よりも作業量が低かった。これは社会的アイデンティティの強い集団では動機づけが上昇し社会的努力が起こることを示している。さらに、木製棒課題において、集団の顕現性とパフォーマンスの関係を集団同一視が媒介することが確認された。なお、ブレインストーミング課題では、実験1と同様に集団同一視の媒介効果は見られなかった。木製棒課題は動機づけ要因の影響を直接受けるが、ブレインストーミング課題では創造性能力や題材についての経験などがパフォーマンスに関係するという課題の性質の違いが媒介効果の有無の違いを生んだと考えられる。集団同一視の効果は木製棒課題のように単純な課題に見られ、ブレインストーミングのように複雑な課題では見られないのかもしれない。

### 総合考察

社会的アイデンティティ理論と自己カテゴリー化理論に基づき、社会的な手抜きは集団成員性の顕現性の低さにあるという仮説が検討された。成員性の顕現性を高めるために実験1では集団間比較の要因、実験2では友人集団と集団間比較の要因が操作され、集団成員性の顕現性が高まることで集団のパフォーマンスが上昇するかが調べられた。パフォーマンスの上昇に関して実験1ではブレインストーミング課題を用いて、実験2ではブレインストーミング課題と木製棒課題を用いて、その効果が確認された。そして、集団顕現性の高い集団では個人あるいは共行動条件よりもパフォーマンスが高くなる社会的努力が見られた。これは、社会的な手抜きの解消方法として集団の顕現性を高める方法が効果的であることを示している。また、個々の成員のパフォーマンスが識別できない集合的課題においても動機づけの上昇が起こりうることを示している。

集団の顕現性と集団のパフォーマンスの関係を説明する心理的要因として集団の同一視の役割が検討されたが、実験2の木製棒課題において媒介効果が確かめられた。これは、集団の顕現性が高められると集団同一視が強くなりその結果集団の生産性が高くなるという社会的アイデンティティ・アプローチの仮説を支持する結果である。集団同一視の媒介効果がブレインストーミング課題で見出されなかったのは動機づけ要因以外の創造性能力や題材への経験などが関連する課題特性によると考えられる。

本研究では、集団成員性の顕現性を高めることが共行動的に仕事をする個人よりも高いパフォーマンスをもたらすことを示すことで、集団で作業することが常に社会的な手抜きを起こすわけではなく社会的努力が起こることもあることを社会的アイデンティティ・アプローチに基づいて確認した。

### 3. Høigaard, Boen, Cuyper, and Peters (2013) の研究

社会的アイデンティティ・アプローチによると、集団の動機づけ上昇をもたらす要因には集団間競争のほかにも成員性を強く意識することによる集団アイデンティティの顕現化も含まれる。その一つにチーム作り (team

building)がある。Høigaard, et al., (2013)は、チームへの同一視を強めるチーム作りがチームのパフォーマンスの維持あるいは強化に役立つのかどうかを肉体的な負荷を求めるスポーツ課題において検討した。

**目的** 固定自転車型エルゴメーターによる「自転車こぎ」課題を用いて、チーム作りをした条件とチーム作りをしなかった条件において社会的な手抜きが起こるか、それとも社会的な努力が起こるかが調べられた。

**方法** 実験参加者は18人の女子高校生で、ハンドボールやサッカーなどのチームスポーツの選手であった。彼女らは3人1組で1分間と3分間、できるだけ一生懸命に自転車をこぐ「自転車こぎ」課題に従事した。個人試行では各人の走行距離が記録され(個人試行群)、集団試行では各人の走行距離ではなくチーム全体の走行距離だけが記録される(集団試行群)ことが教示された。個人条件、チーム条件とも順位が公表されると告げられた。実験群であるチーム作り条件では、チームへの同一視を高めるために、課題実施の前にそれぞれの集団にロゴマークがついた同じ色のTシャツを着てもらい、チーム作りのためにチームの名前やスローガンを考えてもらった。統制群ではTシャツの着衣はなく、チーム作りも行われなかった。「自転車こぎ」課題をする前に、チームへの同一視の強さを測定するためにDe Becker et al., (2011)が作成した6項目からなる尺度に答えてもらった。

**結果** パフォーマンスに関して図4に1分間条件における各条件の走行距離を示す。チーム作りの有無×試行条件(個人:集団)の分散分析を実施した結果、交互作用が有意であった( $p<.05$ )。チーム作り無しの統制群では集団試行の方が個人試行よりも走行距離が短かった( $p<.05$ )。これは社会手抜きが起こっていることを示している。チーム作り有りの実験群では、集団試行群と個人試行群の走行距離に差は見られなかった。これは、チーム作りにより社会的な手抜きが消去されたことを示している。

図5に3分間条件における各条件の走行距離を示す。1分間条件と同様の分散分析を実施した。チーム作り無しの統制群では集団試行の方が個人試行よりも走行距離が短かった( $p<.01$ )。これは社会的な手抜きが起こっていることを示している。一方、チーム作りを行った実験群では個人試行よりも集団試行の走行距離が有意に長かった( $p<.05$ )。これは3分間条件において社会的な努力が起こっていることを示している。

なお、チームへの同一視の程度はチーム作り条件( $M=6.4, SD=0.5$ )の方がチーム作りのない統制群( $M=4.4, SD=0.7$ )よりも有意に高かった( $p=.001$ )。

パフォーマンスとチームへの同一視の程度に関する結果は、チーム作りによって集団同一視が高まり、社会的な努力が起こったと考えることができる。

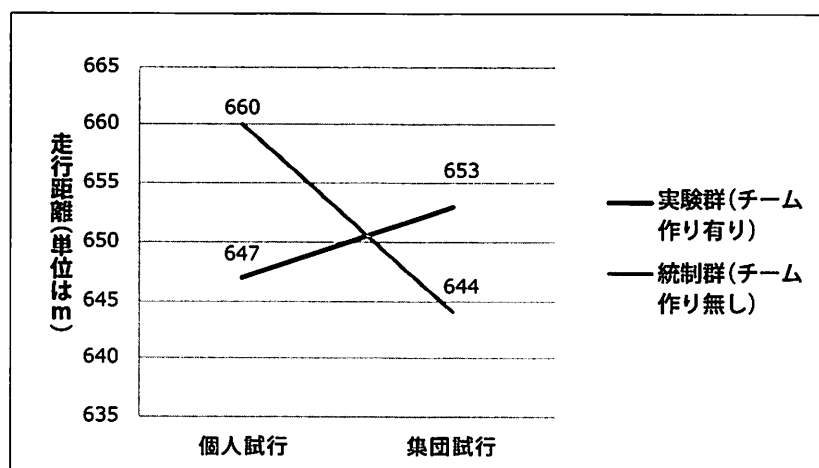


図4 1分間の走行距離 (Høigaard et al.(2013)のp.37に掲載されたTable 1を基に著者が作図した)

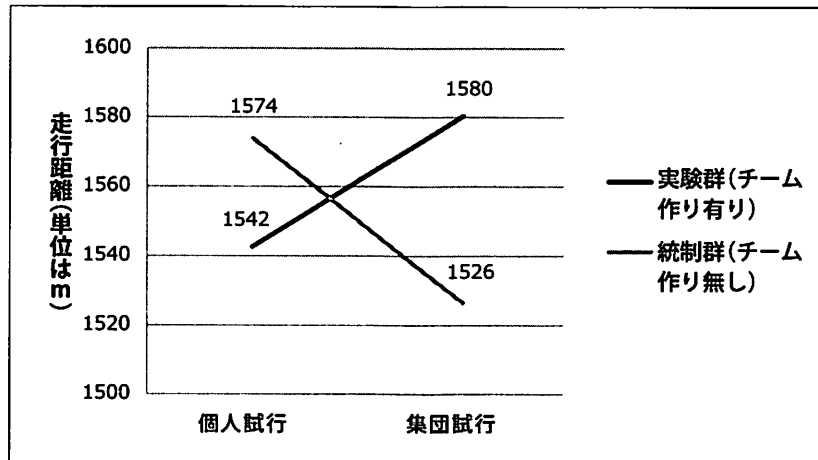


図5 3分間の走行距離 (Høigaard et al. (2013) のp.37に掲載されたTable 1を基に著者が作図した)

**考察** 本研究の結果は、1分間条件において、チーム作り無しの統制群では社会的手抜きがみられ、チーム作り有りの実験群では社会的手抜きがみられなかった。3分間条件において、チーム作り無しの統制群では社会的手抜きがみられたが、チーム作り有りの実験群では集団条件における動機づけが高まり、社会的努力がみられた。1分間という短い時間の場合、実験参加者の注意は内向きになり課題に向けられ、チームのためというよりは単に最大限の努力を目指すことに向けられたと考えられる。一方、3分間という長い時間の場合、注意が状況やチームメートに向けられたと考えられる。注意の指向の違いが社会的努力の生起に影響したのではないだろうか。

本研究において、統制群よりも実験群の集団同一視が高かったことを考慮すると、集団同一視が高まると動機づけが上昇し、社会的手抜きが消去する、あるいは社会的努力が生じるという社会的アイデンティティ・アプローチの予想が支持されたといえよう。

## まとめにかえて

本稿では、集団活動を維持しながら集団の動機づけを高める方策を探るために、社会的アイデンティティ・アプローチに基づいて提唱された社会的努力に関する3件の研究(6つの実験)をレビューした。

まず、Worchel et al. (1998) は、紙の鎖を作る単純課題を用いた3つの実験を実施し、内集団の顕現性を高めることで集団同一視が高まり、動機づけが上昇するかを検討した。実験1では将来の相互作用の可能性や集団報酬があると動機づけが上昇し社会的手抜きが消去されることを確認したが、集団報酬条件における社会的努力を明確に見出すことはできなかった。実験2では単独状況よりも金銭的報酬条件の方が高い動機づけを示す社会的努力が起こることを確認した。また、同じ報酬条件の中で集団報酬のほうが個人報酬よりも高い動機づけを示すことを確認した。実験3では外集団の存在が成員性の顕現性を高めて単独状況よりも集団状況においてパフォーマンスが高くなる集団促進が起こり、外集団がない場合は単独状況よりも集団状況のパフォーマンスが低くなる社会的手抜きが起こることを確認した。さらに、媒介分析の結果、外集団の存在とユニフォームの存在が集団同一視の高まりを媒介して集団の動機づけ上昇を起こすことを確認した。

次に、van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, & Tissington (2009) は、2つの実験を実施し、集団成員性の顕現性を高めると集団同一視が高まり、社会的努力が起こるかを検討した。実験1では、ブレインストーミング課題を用いて、集団間比較があると集団同一視が高まり社会的努力が起こることを確認した。実験2では、ブレインストーミング課題の場合、友人や集団間比較により集団の顕現性が高まると動機づけが高まることを確認した。また、木製棒課題の場合、友人や集団間比較により集団の顕現性が高まると動機づけが高まる

こと、それと単独状況の共行動集団よりもパフォーマンスが高い社会的努力が起こることを確認した。さらに、媒介分析の結果、ブレンストーミング課題では集団同一視の媒介効果は見られなかったが、木製棒課題において集団同一視の媒介効果が確認された。

最後に、Høigaard, et al., (2013) は、自転車こぎ課題を用いて、3分間の長い時間の自転車こぎの場合、チーム作りをした集団で集団条件における動機づけが高まり、個人条件よりもパフォーマンスが高くなる社会的努力が起こることを確認した。

このように、3件の研究において集団の同一視が高まるような状況では集団における動機づけが高まり、場合によっては単独状況のパフォーマンスよりも集団状況のパフォーマンスが有意に高くなる社会的努力がみられることが示された。また、集団成員性の顕現性の高まりが集団同一視を媒介して動機づけ効果を生み出しているという媒介効果が確認された。これにより、社会的アイデンティティ・アプローチが提唱する「社会的アイデンティティの顕現化」→「集団同一視の強化」→「集団における動機づけ上昇」のプロセスが明らかにされたといえよう。

ところで、Høigaard, et al. (2013) の1分間課題では社会的努力は見られなかった。今後の検討課題として、どのような課題状況において社会的努力が起こりやすいのか、あるいは起こりにくいのかを明らかにすることがあげられる。また、van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, & Tissington (2009) では、集団同一視の媒介効果がブレンストーミング課題では見られなかった。今後の課題として、課題の複雑さなどの課題特性と集団同一視の媒介効果との関連性を検討する必要があるだろう。

## 文献

- De Becker, M., Boen, F., Ceux, T., Høigaard, R., De Cuyper, B., Callens, F., Fransen, K., & Broek, G. V. (2011) Do perceived justice and need support of the coach predict team identification and cohesion? Testing their relative importance among top Volleyball and handball players in Belgium and Norway. *Psychology of Sport & Exercise, 12*, 192-201.
- Ellemers, N., & Haslam, A. (2012). Social identity theory. In P. A. M. van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (eds), *Handbook of Theories of Social Psychology, Vol.2*, pp.377-398. SAGE.
- Forsyth, D. (2017). *Group dynamics, 7<sup>th</sup> ed.* Cengage.
- Harkins, S.G. & Szymanski, K. (1989) Social loafing and group evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 934-941.
- Haslam, S. A. (2004). *Psychology in organizations : The social identity approach.* SAGE.
- Høigaard, R., Boen, F., Cuyper, B. D., & Peters, D. M. (2013). Team identification reduces social loafing and promotes social laboring in cycling. *International Journal of Applied Sports Sciences, 25(1)*, 33-40.
- Karau, S. J. & Williams, K. D. (1993). Social loafing: A meta-analytic review and theoretical integration. *Journal of Personality and Social Psychology, 65*, 681-706.
- 小窪輝吉 (2010). 集団の動機づけ上昇に関する一考察 —ケーラー効果とその再現研究—鹿児島国際大学福祉社会学部論集 第29巻第3号、51-70.
- Latané, B., Williams, K. D., & Harkins, S. G. (1979). Many hands make light the work: The cases and consequences of social loafing. *Journal of Personality and Social Psychology, 37(4)*, 822-832.
- Latham, G. P., & Locke, E. A. (2007). New developments in and directions for goal-setting research. *European Psychologist, 12(4)*, 290-300.
- Shaw, M. E. (1981). *Group dynamics: The psychology of small group behavior.* New York: McGraw-Hill.
- Simms, A., & Nichols, T. (2014). Social loafing: A review of the literature. *Journal of Management Policy and Practice, 15(1)*, 58-67.
- Steiner, I. (1972). *Group process and Productivity.* Academic Press.
- Tajfel, H. (1974). Social identity and intergroup behaviour. *Social Science Information, 13*, 65-93.
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations.* London, Academic Press.
- Tajfel, H., Billig, M.G., Bundy, R.F., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology, 1*, 149-177.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin and S. Worchel (eds), *The social psychology of intergroup relations*, pp.33-47. Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). *The social psychology of groups.* New York: Wiley.
- Turner, J. C. (1982). Towards a cognitive redefinition of the social group. In H. Tajfel (ed.), *Social Identity and Intergroup Relations*, pp.15-40. Cambridge: Cambridge university Press.
- Turner, J. C. (1985). Social categorization and the self-concept: a social cognitive theory of group behaviour. In E. J. Lawler (ed.), *Advances in group processes*, pp.77-122. Greenwich, CT: JAI Press.
- Turner, J. C., & Reynolds, K. (2012). Social categorization theory. In P. A. M. van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (eds), *Handbook of Theories of*

*Social Psychology, Vol.2*, pp.399-417. SAGE.

- van Dick, R., Stellmacher, J., Wagner, U., Lemmer, G. and Tissington, P. (2009). Group membership salience and task performance. *Journal of Managerial Psychology*,
- van Dick, R., Tissington, P. A., and Hertel, G. (2009). Do many hands make light work?: How to overcome social loafing and gain motivation in work teams. *European Business Review*, 21(3), 233-245.
- Weber, B., & Hertel, G. (2007). Motivation gains of inferior group members: A meta-analytical review. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 973-993.
- Williams, K. D., Harkins, S., & Latane, B. (1981). Identifiability as a deterrent to social loafing: Two cheering experiments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 303-311.
- Williams, K., & Karau, S. J. (1991). Social loafing and social compensation: The effects of expectations of co-worker performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 570-581.
- Witte, E. H. (1989). Köhler rediscovered: The anti-Ringelmann effect. *European Journal of Social Psychology*, 19, 147-154.
- Worchel, S., Rothgeber, H., Day, E. H., Hart, D., & Butemeyer, J. (1998). Social loafing and individual productivity within groups. *British Journal of Social Psychology*, 37, 389-413.

# A Study of Social Laboring: Review of experimental studies based on the social identity approach

Teruyoshi KOKUBO

As social loafing has detrimental effects on the working groups, strategies to eliminate them have been suggested by many researchers. One of them is to enhance the social identification with the group which one belongs to. According to the social identity approach, if the individual categorizes himself or herself as a member of a group and realizes that the group membership is incorporated into his or her self-identity, he or she will enhance his or her identification with the group and then he or she will be motivated to work harder for it. Haslam (2004) called the motivation gains with which people increase their efforts when they work in groups as compared to when they work alone, “social laboring”.

In this paper I reviewed three experimental studies (6 experiments) which discovered the social laboring effects in group settings (Worchel, Rothgerber, Day, Hart, & Butemeyer, 1998; van Dick, Stellmacher, Wagner, Lemmer, & Tissington, 2009; Hoigaard, Boen, Cuyper, & Peters, 2013). Although most experiments confirmed the social laboring effect, a few studies failed to find the effect. In the future research, the relationships between characteristics of the task and the social laboring effect should be clarified.

**Key Words:** social laboring, social loafing, group motivation gain, social identity approach, group identification